

98. キタムラサキウニ *Strongylocentrotus nudus*

(A. Agassiz) 図版41

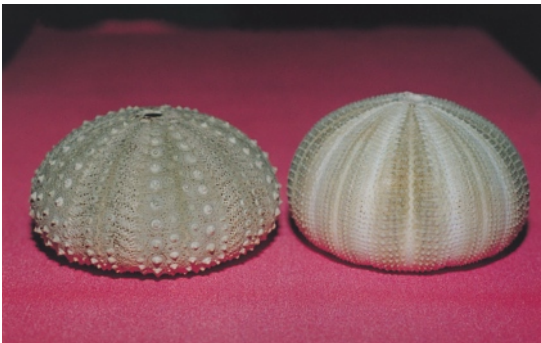
英名 northern sea urchin

露名 чёрный ёж, морской ёж

地方名(北海道) ムラサキウニ、ノナ、シロ

漢字 北紫海胆

アイヌ語名 ニノー、アウシニノ、クンネニノ



棘を取り除いたキタムラサキウニ (左) と
エゾバフンウニ (右) の殻

【形態】 殻はエゾバフンウニよりも厚く強固である。エゾバフンウニと同様に長い棘*と短い棘があり、それぞれ主疣*と副疣*から出る。長い棘は1.6～3.0cmに達し、棘の表面には細かい縦線があり、先端はあまりとが

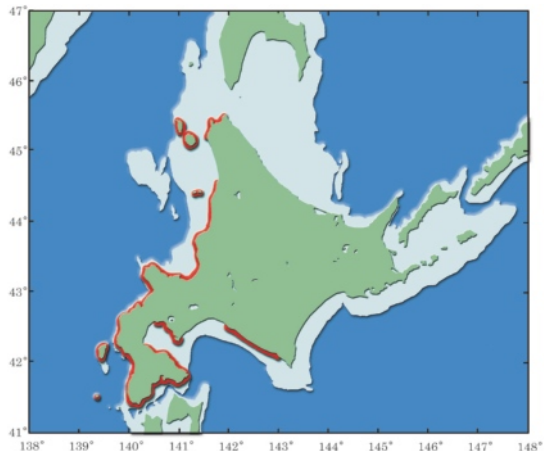
らない。主疣は副疣よりも大きく、管足孔^{かんそくこう}*は6対あり、エゾバフンウニよりも多い。体色は濃い紫色である。

【生態】 太平洋側では北海道のえりも岬から相模湾^{さがみ}まで、日本海側ではサハリン南部から朝鮮半島沿岸までと、北海道から対馬^{つしま}までの沿岸に分布する。このうち日本国内で本種を漁獲している地域は、富山県および茨城県以北の本州と北海道の日本海沿岸、津軽海峡、えりも岬以西の太平洋沿岸である。エゾバフンウニが北海道のほぼ全域で漁獲されているのに対し、キタムラサキウニはえりも岬以東太平洋からオホーツク海では生息量が少ないため漁獲されていない。潮間帯*から水深180mまでの転石*、玉石*、岩盤地帯に生息するが、漁獲や移殖*の対象となるのは水深20～30mより浅みにすむものである。寿命は14～15年とされ、エゾバフンウニよりも長い。

キタムラサキウニの生殖巣は6～8月に最も発達し、産卵期は水温が下がり始める9～10月である。エゾバフンウニのように産卵期が海域により大きく異なることはなく、北海道から京都府までの広い範囲で同じ時期に産卵する。生殖巣は、餌料となる海藻が繁茂する海域では良く発達するのに対し、磯焼け*地帯や深みでは周年あまり発達しない。

北海道の日本海沿岸では、キタムラサキウニの浮遊幼生*は9～10月に出現し、浮遊期間は1～2カ月に及ぶ。産卵から浮遊幼生を経て稚ウニにいたる発育過程はエゾバフンウニとほぼ同様であるが、人工種苗*生産過程での幼生の浮遊期間は水温20°C前後で15日程度とエゾバフンウニよりも短い。幼生の主な着底*場所は紅藻類の1グループであるサンゴモ*の群落である。これは無節サンゴモが生産するジブロモメタンという揮発性物質が幼生の変態*を誘引するためとされる。サンゴモ群落は自分の群落に集めたキタムラサキウニの摂食活動を利用して、ほかの海藻の侵入を防ぎ、海底を独占すると考えられている。

ウニ類は、特に4腕期*以降の浮遊幼生期に著しく減耗するといわれる。9月の水温が20°C以上で



北海道におけるキタムラサキウニの漁場

推移すると翌年の稚ウニの発生量が増えるが、これは自然死亡が起こりやすい浮遊期間が高水温によって短くなり、生残率が高くなるためと考えられている。

満1歳以上のキタムラサキウニは生殖巣の発達に向けて夏から秋にかけてコンブなどの海藻群落へ移動して活発に餌をとる。コンブ目褐藻^{かつそう}*類が優占する海域では、約2年で漁獲サイズの殻径^{かっけい}*50mmに達する。餌としてコンブを与えた場合には、6月に最も活発に摂餌^{せつじ}し、1日に体重の約5～10%のコンブを食べる。一方、水温が最も低くなる2月と最も高くなる9月には1日に体重の約1～4%程度しかコンブを食べなくなる。

外敵として、エゾバフンウニと同様に、ヒトデ類やカニ類などが知られている。また、クリイロヤドリニナという小型の巻き貝が寄生*すると、へい死することがある。